

# 小学校家庭科における消費者教育・金銭教育の研究

## — 消費者リテラシーの視点から —

教育実践研究科 教職実践専攻 教職実践基礎領域  
吉津 美沙紀

### 第1章 本研究の目的と意義

#### 第1節 研究の目的

本研究は、筆者の専門性を初等教育と融合させた PCK (pedagogical content knowledge) の概念に基づき実践研究を行ったものである。筆者は大学4年間を通して、中等家庭科教育及び家政経済を専門に学んできた。教職大学院に進学し、小学校でのサポーター活動を通じた、教科教育を中心とした実践研究にむけて、小学校家庭科教育における教科実践を対象とした。

本研究は、実践者によるアクションリサーチ (実践研究) である。これを倉本(2014)では、「教職大学院生が、自己実践の改善を通して、教師的素養に関する自己成長を実感できるような第一人称の実践研究」であり、実践に関与・観察しながら省察 (Reflection) によって自己実践を発展するものであると述べている。最終的には、実践に関して量的研究・質的研究の2つの視点から実証・考察を行い、本実践に対する成果と課題を明らかにし、今後の教育実践に生かしていきたい。

#### 本研究の Research Question

- ・小学校家庭科の範囲において金銭教育を伴う消費者教育を整理し、形成できる消費者リテラシーとはどのようなものなのかを明らかにし、定義すること。
- ・定義した消費者リテラシーを使って考察と実践を通じた単元を構想し、問題解決的に座席表を SCAT で分析し、子どもの消費に関する見方・考え方が実践前後にどのように変容し消費行動に表れているかを明らかにすること。

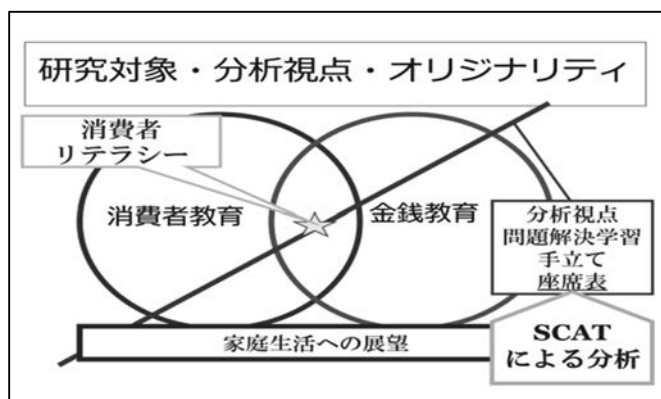
#### 第2節 研究の意義

本研究の意義は、理論的意義 (価値) と実践的意義 (価値) の2点ある。

理論的意義として、先行研究での、消費者教育と金銭教育の重なりから、本実践研究における小学校家庭科で育成する消費者リテラシーを定義する。実践的意義として、家庭科教育の中で消費者リテラシーの育成を目指した固有的な研究でありながらも、子どもの家庭生活を中心とした問題解決学習を目指した授業実践を行うことである。子ども一人ひとりのことを理解する視点を持つために、具体的な方策として座席表を用いて学習シートを作成し、SCAT で分析をする。今後の教育実践に向けて力量向上という価値を有する。

#### 第3節 本研究の全体構想図

本研究は、連携協力校の既存のカリキュラムを基に事前に定義した消費者リテラシーの育成を目標として、発展させたものである。小学校家庭科における消費学習について、経験的活動を含めた学習を行った。方法論から見れば普遍性、汎用性が高いものであると言えるだろう。本研究では、消費リテラシーを消費者教育及び金銭教育の重なりから、目標論として定義し、消費学習においても子どもが実践的な家庭生活の展望を育むことができる授業実践を目指したものである。



(筆者作成)

#### 第4節 子どもの生活を中心とした家庭科教育論

今日の家庭科教育における研究機関として日本家庭科教育学会がある。日本家庭科教育学会が2019年8月に行った夏季研究大会では、家庭科教育において「生活リテラシー」の育成について取り上げられた。

荒井(2019)によると、「家庭科は、自己や家族の生活を見つめ、より良い生活とは何かを考え、それを実現する育成を目指している。」と述べている。また、「生活」を学習対象とする唯一の教科として、知識や技能を活用し、良い生活をつくらうとする力を「生活リテラシー」と述べている。

このように、家庭科は子どもの家庭生活を対象としてきた教科と言える。子どもの家庭生活を想像することや子どもの家庭での役割、地域の環境も含めた教材選択が必要である。筆者は、知識や技能の獲得とそれを活用し、自らの生活を改善していく子どもたちの姿を目指している。そのために、子どもの生活を中心とした問題解決学習を行い、授業実践の過程のなかで子どもの見方・考え方がどのように変容しているのかを明らかにし、今後の教育実践に生かせる実践研究としていく。

## 第2章 本研究（消費者教育におけるカリキュラム研究）における先行研究の総括

### 第1節 目標論に関わる理論研究

#### 1-1 消費者教育に関する理論研究

##### 消費者教育の現状

消費者教育と聞いて具体的にどんな学習のことかイメージすることは難しい。藤江（1979）によると「消費者教育は学校教育で取り扱われるようになったのは、1980年の後半に経済企画庁（国民生活局などが後任）が消費者教育を強調し、1989年の学習指導要領・家庭科に消費者教育を積極的に取り入れることで始まった」と言われている。よって家庭科教育において消費者教育の実践が検討されてきた背景がある。また藤江によると、「消費者教育が家庭科学習で進められた1980年代後半は、学校教育における消費者教育とは、何を基礎として押さえるべき内容であるのか不明確なことが多かった。」とし、以降授業の実践研究が教員や研究者の中で進められてきた。

家庭科教育における消費者教育について、鶴田（1992）によると「自主的、合理的に判断できる消費者の育成」ということが言われている。自主的とは「他者によって導かれるのではなく自己の純粋な立場において行うさま」を指すのであり、合理的とは「論理の法則にかなっていること、科学的認識に合致すること、行為が無駄なく計算され能率的に行われること」とされている。またこの消費者の育成を受けた消費者を「賢い消費者」としている。賢い消費者とは、「知識と判断力をもって自分の生活を管理できるだけでなく、消費者が経済上、安全上の不利益を受けないような方策を求める消費者でもなければならない。つまり、企業を主導とした流れに、消費者の意見を反映した流れを作り出す消費者の育成でもならなければならない」としている。

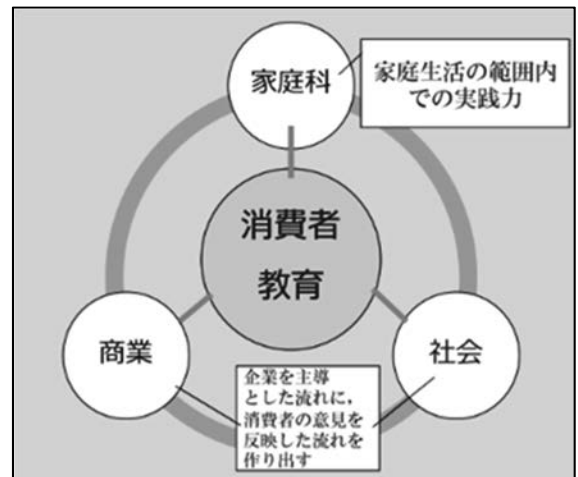
鶴田によると、子どもが賢い消費者として買い物をするときに、「自分の納得のいく判断をするためには、科学的、論理的な判断が必要になる。「価格」「品質」「時間」「労力」「機能性」「流行」と商品に存在する要素を自分の価値観から決定するには知識と判断決定のためのプロセスの知識が必要になってくる。直観や経験によって得られた能力で判断するのではなく、知識や予測できる学力をもって判断できる消費者」としている。そしてこの面における学力を習得するためには、学校教育が必要になる。

##### 1-1-1 消費者教育に関するカリキュラムの先行研究

武藤（1992）は家庭科教育に消費者教育がすすめられた80年代後半の消費者教育とカリキュラムについて、以下のように述べている。「カリキュラム（curriculum）とは教育課程のことで、学校生活全般の指導計画にかかわる幅広い内容をもっている。それは教科指導と教科外活動を含んでいるが、その中で教

科における学習内容や教材内容を示す学科課程を指すことが一般的である。日本では、消費者教育に関する内容が第4次の改訂（1968～1970）から社会科・家庭科・商業科の教科の中に取り入れられている。」武藤によると消費者教育を分担すべき家庭科と社会科・商業科との連携が図られていなかったと述べている。消費者教育がすすめられた当初から、連携の必要性は叫ばれていた。

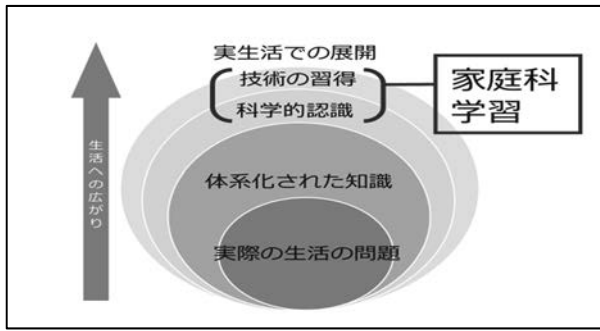
また武藤は、消費者教育が行われている教科のなかで、家庭科の特徴について以下のように述べている。「家庭科では具体的な消費行動の認識を通して、どう消費生活を主体的に営んでいくのかという点をもっている」としている。したがって消費者教育の視点から見た場合、「家庭生活の範囲内での実践力を指向する家庭科観においては、消費者の内的側面にのみウエイトを置いた企業主導の経済社会に順応する消費者を育成することになり、自立する消費者は期待できない」としている。賢い消費者の育成に必要な、企業（経済）に意見を反映させる消費者の育成について学ぶには、社会科や商業科による、消費者の外的側面から消費について考える必要が読み取ることができる。



（鶴田・武藤を参考に筆者作成）

##### 1-1-2 家庭科における消費者教育の有意性

武藤（1992）は、家庭科を「自分や家族の生命や新たな生命を守り育てるための生活を対象としながら、その対象の科学的認識と技術の習得を学ぶ教科である。」とし、この二つの内容が総合的に学習されるところに家庭科の独自性があるとした。家庭科における消費者教育にあつて、この二つの内容を目的とするカリキュラムとして、消費に関する知識を主体とする教科カリキュラムのみに偏ることないようにすすめていく。家庭科の学びと家庭生活のつながりから、実践力の育成という目標を受けてすすめているからこそである。武藤は「実際の生活問題と体系化された知識との統合、科学的認識と技術との相互作用、学習された知識・技術が実生活での展開を図るなどの関連が組織されたカリキュラム構造が必要」としている。



(武藤を参考に筆者作成)

## 1-2 金銭教育における理論研究

本実践では経験活動としての金銭を取り扱った消費者教育を対象としていた。よって、消費者教育と金銭教育の違いと相違点を整理していき、家庭科教育で育てていく姿を定義していくこととした。宮坂 (2005) によると「金銭教育という教育は文部科学省関係の公式文書に記載されることはなく、消費者教育と異なり、小中学校の学習の内容を規定している学習指導要領の中にも見当たらない。」金銭教育は文部科学省や学校教育によってつくられたものではないことが分かった。

「日本銀行の中にあった貯蓄広報中央委員会によってつくられたものである。」現在でも金銭教育の普及や推進の中心機関としており、現在の名称は金融広報中央委員会である。

### 1-2-1 金融広報中央委員会による金銭教育の推進

宮坂 (2004) によると「金融広報中央委員会では、金銭教育を普及・推進する手立てとして、毎年各都道府県に2から3の研究指定校を設けている。」指定校では金銭教育に関わる実践研究が2年間を通じて行われ、金銭教育を理論的背景とした実践授業が行われている。実践校について宮坂によると、これらの指定校の教員が受ける金銭教育の予備知識として、2000年に出された「学校における金銭教育の進め方—総合的な学習の時間を中心として—」を使っている。

### 1-2-2 金銭教育とは

宮坂 (2004) の整理によると貯蓄広報中央委員会 (2000) は金銭教育について以下のように述べている。「学校における金銭教育の進め方によると、金銭教育は健全な金銭感覚を養い、ものやお金を大切にし、資源の無駄づかいを避ける態度を身に付けさせ、それを通じて自立して生きることができ、社会の形成者としてふさわしい人間形成を目指す教育としている。」これに対して、宮坂 (2004) は金銭感覚という言葉に違和感があると述べている。また金銭観に至るべきだと説いている。「感覚には金銭について捉えるという認識的機能が含まれているが、感情的側面が重視される」と指摘している。金銭教育は個の感覚や感情などの気分で変わってしまうものであってはならない。感覚は教育の場において、教師が子どもに押し付けることになりかねないからである。本実践では、金銭の系統的な価

値をもって、金銭観として見方・考え方を確立していく。

### 1-2-3 金銭教育の目指しているもの

金銭教育が目指しているものは、金銭について知ることではなく、金銭を正しく使う能力を育てることとしている。金銭教育はお金を大切に使うということをとっても、また宮坂 (2004) は「金銭 (の機能や役割) について教えることが前提となる。」よって金銭を扱う経験的学習を進める場合、金銭の機能や役割に関する事前学習を行う必要がある。金銭教育においても、事前学習で科学的認識を得て、技術の習得を経験的に行う単元の構造を検討すべきであると捉える。

### 1-2-4 小中学校で金銭教育を進める意義

児童生徒にとって、まだ家庭生活の主体ではない。だから先行実践も含め、学校教育における金銭教育は、資金運用などの子どもに対して消費の主体になることは求めている。だが、子どもは金銭と関わりなく生活しているわけではない。現在はスマートフォンが普及し、お小遣いやお年玉の使い道も多様化している。かつては、現金によるいわゆるモノを買っていることが前提となっていた。なにかを買った場合は何を買ったか保護者が把握することができた。しかし、インターネット上の音楽をダウンロードやアプリ、ゲームなど情報を手にすることも用意となっており、物質的にどんなものをどのくらい買ったのか、保護者が把握することは明確ではなくなっている。小遣いの使い方を計画なく衝動的な消費をしてしまう子どもいる。

宮坂 (2005) は「金銭の使い方という角度から見れば金銭教育であれば金銭教育であるが、商品やサービスの買い方という視点でいえば消費者教育である。」とし、これを「金銭教育即消費者教育」とした。これは「計画的に消費し、計画的に貯蓄をするような生活主体の形成を目指すこと」が前提であるという。また「小学校においては金銭教育を行って収支のバランスに配慮するような態度やほんとうに必要なものをよく調べて買うような消費者行動を身に付けさせること」が具体的な姿としてあげられている。

### 1-3 金融教育について

金銭教育の推進を行っている金融広報中央委員会では、次世代を見据えた教育課程がすすめられている。これが金融教育である。

#### 1-3-1 目標設定としての金融リテラシー

金融と聞くと金融リテラシーという言葉を目にする。金融リテラシーと並んで「正しい」という言葉がよく並んでいる。藤田 (2018) は金融リテラシーについて以下のように述べている。「金融に関する知識や情報を正しく理解し、自らが主体的に判断することができる能力。単に知識や情報を得るだけではなく、それらを整理し、何が自分にとって必要なのか、自分はどうのように行動するのか、選択し決めていくことができ

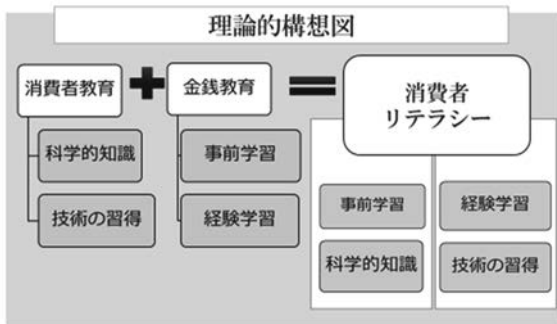
なければならない。」としている。小学校・中学校の家庭科では、金融リテラシーに関する学習項目として、「消費生活」と「環境」というキーワードが共通して入っており、そこに含まれる学習内容も系統性がある。

1-4 先行研究の総括

消費者教育や金銭教育・金融教育について先行研究を行った。3つを含めて、今求められている教育課題を各学校の教育課程に位置付け、どのように生かすかを検討した。新学習指導要領が求めるカリキュラムマネジメントを意識しても、学校の教育課程を踏まえた教育の推進が必要であるといえる。

1-5 消費者教育と金銭教育の関係性と消費者リテラシーについて

金融教育についての先行研究を行う中で、目標論としてリテラシーを定義することで、実践を行っていく際の目指す能力を整理して実践することができると捉えた。本研究では、商品を正しく使用方法や計画的なお金の使い方について実践・考察した授業事例である。全体として、消費者リテラシー育成の視点を含んだ経験的消費行動について展開する。カリキュラム開発という点では不十分なものとなったが、本研究が消費者教育の一助となれば幸いである。



(筆者作成)

第2節 方法論としての問題解決学習の理論研究  
2-1 問題解決学習

筆者が在学している愛知教育大学がある愛知県の三河地方では、問題解決による子どもありきの教育が勧められている。本実践研究を行った連携協力校である小学校も三河地方にあり、授業検討では座席表の活用や子どもの発言記録を手立てとしている。本研究の実践的価値として、教員養成期の筆者が問題解決学習を方法論として、授業実践や子ども理解の力量の向上としての目的がある。

2-2 座席表について

星野(1995)は授業を進めるにあたって、「子どもを知る。その為に、カルテを記録し、座席表にまとめる。全体のけしきを描き、座席表授業案を作る。ひとりの個を広く深く知る手がかりとして抽出児を設定する。」という。星野は「教師は子ども(子どもの思い)を知らなければ教育に当たることができない。」また子どもの気持ちや考えを、正確に把握することはできない。

という思いが含まれている。これを受けて、一人ひとりの個性を認め、子どもの生活のなかで生まれた問題を生かしながら学習意欲につながるのか考えること(子どもの思考の流れ)を大切にしていきたい。「子どもを知る」そのために、学習シートを座席表にまとめる。参考文献には、教員経験のない学生に対しても実践できるような実践の例が載っていると書かれており、誰でも・今からでもすぐに実践できるのが座席表指導案式の子どもの観察の手立てであるということも踏まえて実践する。

2-3 座席表分析として SCAT を用いる

子どもの発言を座席表におとすことで、子どもの意見の相違を一目で見ることが出来る。しかし、教師経験年数が短い・問題解決学習における理解が未熟な若手教員において、座席表を使いこなすことは容易ではない。そのために、座席表指導案を分析する方法として、SCATを用いて子ども一人ひとりの学習シートを丁寧分析する。



(筆者作成)

第3章 実践概要  
第1節 カリキュラム  
単元構想図

5年生2学期	家庭科	家にある物は買わないようにしたいな。 ほしい物か必要な物を考えて買い物したいな。		
6年生1学期	家庭科	衣類を清潔に保つために、汚れに洗濯の仕方工夫できるよ。 衣類の種類によって取り扱い・絵表示を確認するよ。		
6年生2学期		家族にお土産を買いたいな。5,000円も使えるのか、八つ橋買いたいな。		
		日程	実習内容	視点
	第1回	9月18日	人と環境を考えた買い物〜このマークを知っている?〜	消費者教育
	第2回	9月25日	断り方を考えよう〜こんな時なんと言ったらいいかな〜	金銭教育
	第3回	10月2日	消費税について〜昨日から10%になったよ〜	消費者教育
	家庭科	10月8日	修学旅行のお土産計画をたてよう。	
	第4回	10月16日	レシートについて考えよう	金銭教育
	総合的な学習	10月18日	班ごとにお土産を買う計画を立てよう	
	第5回	10月23日	買い物計画表の使い方と作成	消費者教育
			10月28日 29日 修学旅行(実践活動)	
家庭科	10月30日	修学旅行の買い物を取り返そう		

第2節  
実践授業

2-1 教師力向上実習 I (予備実践)

小学校6年生 家庭科

令和元年5月27日(月)～令和元年6月21日(金)の期間に行われた教師力向上実習 I を予備実践とする。予備実践では、家庭科のC衣生活・住生活の領域内の「暑い季節を快適に 洗濯をしてみよう」において、

消費リテラシーにおける身近な商品の取り扱いを衣類の取り扱い絵表示から考える。

予備実践「衣類の取り扱い絵表示からみた身近な物の取り扱いについて考える」

## 2-2 教師力向上実習Ⅱ（本実践）

小学校6年生 家庭科・総合的な学習の時間・特別活動

令和元年9月30日(月)～令和元年10月25日(金)の期間に行われた教師力向上実習Ⅱを本実践研究における本実践とした。本実践では、小学校家庭科の消費生活と環境の領域内の「じょうずに使おうお金と物」を主要教科とした、あらゆる教育活動と関連させる消費者教育として修学旅行とつなげた。消費リテラシーにおける商品の情報をみて商品選択をすることや計画的に金銭を使った買い物について経験活動を通して行う。

## 第4章 研究の実証

### 第1節 量的研究による実証・考察

#### 1-1 因子分析

本研究の実証・考察では、予備実践前のアンケート及び本実践前後のアンケートの結果を因子分析、パス解析、相関係数、信頼性係数を用いた量的研究で実証・考察を行った。予備実践前と本実践前後にアンケート調査を実施し、子どもの意識調査を行った。

本アンケート調査のサンプル数は連携協力校6年生2クラス74名である。本論では、アンケート調査から得られた結果を基にして、実証・考察を行う。アンケートの項目については筆者が作成したものであるため、因子に整合性があるかどうかを明らかにする必要がある。そのため、アンケート項目をSPSSによる信頼性統計にかけ、尺度の信頼性について検討した。

#### 1-2 信頼性統計による実証・分析

意識調査を踏まえ、SPSS (ver22) を用いて因子の生成を試みた。因子分析の生成及び実証と考察に用いたアンケート調査は予備実践前と本実践前後に調査したデータを用いた。もともとの母数が少ないため、パネル分析で行うこととした。その結果、4つの成分が生成された。因子分析によって「家庭科の子ども像」「消費者リテラシー」「家庭科の教育効果」「学習意欲」の4つの理論が生成された。この因子の整合性を確かめるために、ここでもSPSSによる信頼性統計 ( $\alpha$  係数) にかけ、尺度の信頼性について検討した。結果は以下の通りである。

家庭科の子ども像	0.724
消費者リテラシー	0.529
家庭科の教育効果	0.511
学習意欲	0.413

#### 【信頼性係数の結果】

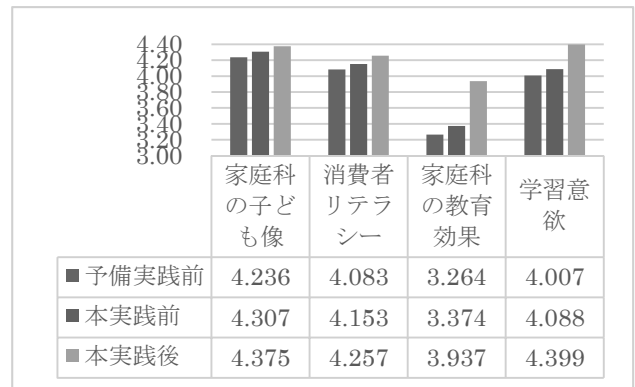
一般的に0.7~0.8以上とされていることが多く、こ

の場合「家庭科の子ども像」の因子の $\alpha$ 係数が0.7以上を示しているため、整合性があり、信頼に値するといえる。「消費者リテラシー」「家庭科の教育効果」「学習意欲」に関しては数値が低く、信頼に値することはできなかった。量的研究において質問項目数に対するサンプル数が少ないと数値が低くなってしまいう傾向がある。今回は本実践における実践を分析する因子分析としてこの4つの因子分析を使用し、研究をすすめる。

#### 1-3 実践前後の意識調査の分析

本節では、予備実践前、本実践前、本実践後に行った実態調査の平均を生成された因子ごとに分けて、その平均値の変容について述べていく。因子はSPSSによる因子分析と信頼性統計を行って生成した「家庭科の子ども像」「消費者リテラシー」「家庭科の教育効果」「学習意欲」である。さらに、SPSSで対応があるT検定を行い、有意であるか検証した。

#### 抽出4因子の比較



生成された4つの因子「家庭科の子ども像」「消費者リテラシー」「家庭科の教育効果」「学習意欲」の平均を予備実践前と本実践前、本実践後の3つの時期で比較した。全体を比較してみると、予備実践前の値がどの項目においても低く、数値が上がっていった。

全体的に見れば、家庭科の子ども像にかかわるアンケート結果の数値が高く、安定的に数値が上昇した。消費者リテラシーにおいてはもともと備わっていたものから、本実践において知識・経験的に獲得するばかりではなかったことが分かる。実践を行ったことで数値を上昇することができた。学習意欲に対しては、本実践後の数値が高くなっている。質問項目にある家庭科や買い物について意欲が高くなっている。とくに家庭科の教育効果に関する数値が大きく変化が見られた。小学校5年生から家庭科の授業が始まる。家庭科という教科についてどんなことを学ぶのかについて、実習などの教科の内容を思い浮かべることがあるが、家庭科を生活として捉えただけで表れだすと捉える。

4つの項目の数値が伸びたことに対する相関については、Amosによる分析を行う。

#### 1-4 パス解析による相互関係数による実証

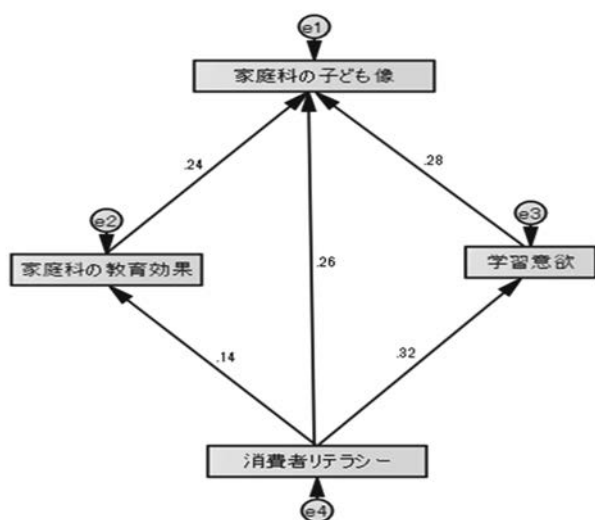
本節では、予備実践事前と本実践前、本実践後のアンケート結果を用いてパス解析を行った結果を述べて

いく。つまり、予備実践前と本実践前、本実践後での子どもの4つの因子に対する因果関係がどのように変容したかを実証し、考察していく。

因子分析の結果、生成された「家庭科の子ども像」「消費者リテラシー」「家庭科の教育効果」「学習意欲」の概念の関係性について AMOS によるパス解析を行った。以下の図は、本実践後（11月）のアンケート結果を用いて筆者が作成したパス図である。

### 基準比較

モデル	NFI Delta1	RFI rho1	IFI Delta2	TLI rho2	CFI
モデル番号 1	.929	.576	.956	.690	.948
飽和モデル	1.000		1.000		1.000
独立モデル	.000	.000	.000	.000	.000



(このパス図を以下「ダイヤ型モデル」と呼ぶ。)

パス解析による関係図とともに、適合度を付属する。モデルの適合度を評価するための統計的指標は、複数提案されている。本研究における、パス解析によるパス図についての適合度は CFI の数値を用いて、因子同士の関係性の適合度を保証する。当該モデルの値が、飽和モデルと独立モデルと比較して相対的にどれくらい飽和モデルの値に近いかを評価する。1 に近いほど適合が良く、0.9 を超えることが望ましいとされる。予備実践と本実践前、本実践後のパス解析の結果をまとめると以下の表になる。

	消費リテラシー→家庭科の子ども像	消費リテラシー→家庭科の教育効果	消費リテラシー→学習意欲	家庭科の教育効果→家庭科の子ども像	学習意欲→家庭科の子ども像
予備実践前	0.18	0.08	0.37	0.27	0.36
本実践前	0.35	0.18	0.19	0.25	0.08

本実践後	0.26	0.14	0.32	0.24	0.28
予備実践前→本実践前	上昇	上昇	降下	降下	降下
本実践前→本実践後	降下	降下	上昇	降下	上昇
変化の概要	予備実践の学習内容で効果が大きい。	予備実践の教育効果が見られたため上昇。	予備実践と本実践に学習内容によって大きく変化。	均衡している。	予備実践と本実践の学習内容によって大きく変化。

全体的に係数の偏りが分散するように変化していることが言える。本実践後の結果から、限られた因子が要因として実践の成果を語るものではなく、互いの要因を受けながら成果を得ることができたと捉える。それを踏まえて個々の回帰係数について分析していく。数値が段階を追うごとに上昇するものではなく、このことから、一つの因子について限った成果ではないことが言える。

### 1-5 量的研究の総合考察

SPSS によって生成した4因子「家庭科の子ども像」「消費者リテラシー」「家庭科の教育効果」「学習意欲」は、パス解析をした結果から、4因子がともに回帰係数が存在する。実習前と実習後で、回帰係数が分布する傾向にあったことから、消費者リテラシーは家庭科の子ども像に直接的に効果を与えるものではなく、家庭科の教育効果と家庭科への学習意欲にも影響を与えながら家庭科の目指す子ども像に迫ることができたと捉えた。子どもの具体的な姿を捉えるために、本研究の「ダイヤ型モデル」が有効であったのかを質的研究によって明らかにする。

### 第2節 質的研究による実証・考察

#### 2-1 KH Coder と SCAT による Triangulation 「間主観による実証」

量的研究での実証が妥当であるのか、また実践過程における子どもの変容が具体的にどのような姿で表れたのかをみとるために、子どもの単元を通じた記述で分析をする。Triangulation を行い、実証と考察を行った。本研究における子どもの消費者リテラシーの変容を読み取るために、学習シートを記述させた。本稿では KH Coder による本実践の子ども記述の傾向の分析と SCAT による買い物学習の子どもまとめを分析する。2つについて、授業実践者、石川敬祐、早川将貴（教職大学院生）の3者による質的考察である Triangulation の方法を用いる。

#### 2-2 KH Coder による分析

##### 1. 語の抽出と頻出後の確認

子どもの振り返りから得られた自由記述データを共起ネットワークで表し、分析対象とした。

### 【1時間目】紙面上の都合により図を割愛

共起ネットワークは抽出語の出現パターンの似通ったものを線で結んだ共起関係を示している。出現数が多い語ほど大きい円で示されている。

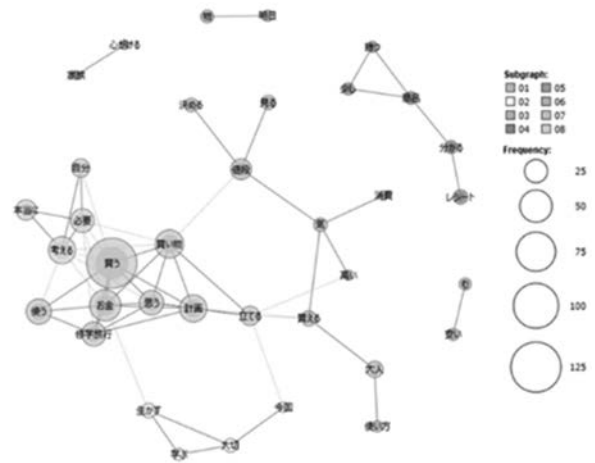
共起ネットワーク図から読み取れる記述傾向は、①買い物の計画を立てる、②商品の値段と量とをみるところを意識する、③賞味期限を気にする、④家族が使えるものや好きなものを優先する、⑤渡す人の人数と自分を含めてメモする、などの特徴を読み取ることができる。もっとも多く抽出された「買う」という語と「計画」「お金」「買い物」「立てる」の結びつきから、「買う計画を立てる」「買うときの使うお金を考える」「修学旅行の買い物計画を立てる」「限られている時間を上手に」「買い物する時間を決める」と書かれていた。このように、子ども自身が修学旅行のお土産購入には計画を立て臨んでいることが述べられていた。次に多く抽出された「値段」と「意識」、「量」といった語彙がまとまっており、商品の選択のうち値段について「意識して」もしくは「量」をみて選択することを挙げていた。その他にも、授業の前半に5年生の買い物学習の復習をした際に、消費期限や賞味期限によって商品を選択することが確認でき、修学旅行のおみやげ購入時にもおみやげを決めるポイントとなることが確認できる。家族の好きなものを優先して買い物をするという記述がみられ、おみやげは、自分が満足する買い物計画ではなく、家族や渡す人のことを考えて計画したことが分かる。おみやげの買い物計画では、買いたいものに順位をつけて買うものの優先順位をつけた。子どもの発言から、家族やおみやげを渡す人を自分より優先した考えたことが確認できる。また、おみやげを渡す人数によって買うおみやげの数を吟味することができたことが確認できる。

### 【2時間目】紙面上の都合により図を割愛

共起ネットワーク図から読み取れる記述傾向は、①買い物をする時間と店を決める、②ルールを守ってそれぞれの意見を聞いていく、③計画を立てる、④買うように決めるのは少し難しい、⑤効率よく回れるように行く、などの特徴を読み取ることができる。もっとも多く抽出された「買う」という語と「時間」「店」「買い物」「決める」「考える」の結びつきから、限られた時間をうまく使っておみやげを買うために各行動班で買い物をするお店を決めることが読み取ることができる。また歩く時間と買う時間をよく考えて計画したことが述べられていた。次に多く抽出された「ルール」と「守る」、「行く」「意見」「上手」といった語彙がまとまっており、買うものを明確にし、行動班の中で共有し合って迷子になる子がいないようにルールを意識しながら行く場所を決めたことを挙げていた。

授業時間内に計画を立てることができた班も、できなかった班もてきぱきと行動したいと言う思いが確認できる。修学旅行のおみやげ購入時には、ある程度お店や時間の見通しをもって回ろうとする思いが確認できる。修学旅行のおみやげ購入には、普段の買い物とは違って、次の工程が決まっており限られた時間である。また班の子と、はぐれないための工夫によって決まりが増えてしまう。複数でまわるため、意見をすり合わせることを迷いながら計画したことが分かる。計画を立てた買い物による迷いや困難さ、不安を感じる側面があったことを読み取ることができる。おみやげの買い物計画では、子どもの発言から、班活動としても個人としても効率よく買い物をしたいという気持ちを読み取ることができる。また、5000円というお金を一人で使うことから、うまく買い物をしたいという思いの表れだと捉えた。

### 【3時間目】



共起ネットワーク図から読み取れる記述傾向は、①修学旅行で買い物をするときを使うお金について、②本当に自分に必要か考える、③今回の学びを大切に生かす、④レシートは商品について分かる、⑤値段を見て決める、などの特徴を読み取ることができる。

最も多く抽出された「買う」という語と「買い物」「お金」「修学旅行」「使う」の結びつきから、お金の使い方に関する記述が多くなった。修学旅行は子どもにとって、買い物の経験活動としてお金を意識したものになったことが読み取れる。経験活動を踏まえたことで、これからの買い物の仕方ではなく、金銭への考え方・使い方が意識されていることを踏まえている。また「本当に」と「必要」の結びつきが特に強いことが読み取れる。子どもは多くの商品の中から、また買っていくお土産の数を頭にいれながら、漠然ともっていった必要なもののなかで優先順位をつけて買い物したことが分かる。3つめについては、記述する前に、今後の買い物について書くように指導したことも考えられる。買い物計画について、買い物は日常的に行っているものであるが、買い物計画を学習だと捉えているこ

と。またこれからの生活で大切にしていきたいという肯定的な意識が表れている。修学旅行の間、レシートがもらえなかったり、商品名まで細かく記述されていなかったことに気づいていた。スーパーやコンビニとは異なる場合があることを知ったり、それを生かして値段を思い出しながら買い物計画を立てる様子を見ることができた。実際に買い物を行う中で、商品購入の視点として、値段を見ることと決めることとのつながりを確認できる。

### 2-3 SCATによる分析

#### (1) 概念 (その分析方法について)

子どもの単元を通した学びを振り返りとしてワークシートに記述させ、質的分析としてSCATを用いた。SCATとは、Steps for Coding and Theorizationといい、大谷(2019)によって開発された質的分析手法である。SCATを分析手法として取り入れた理由は、「比較的小規模の質的データの分析にも有効」であり、「初学者にも着手しやすい」(大谷 2019)とされているためである。分析手順としては、文字化したデータに対し、(1) 着目すべき語句、(2) 着目した語句からデータ外の語句への言い換え、(3) 当該語句のテキスト外概念、(4) テーマ・構成概念という4つのステップのコーディング手続きを踏む。そしてその作業を通して気づいた点を(5) 疑問・課題としてまとめる。本実践では(1)から(4)までの分析を行った。このコーディング終了後、(4)の記述に基づいて「ストーリー・ライン」を作成する。その後、「理論記述」を試みる。ここまでのSCATの一連の流れとなる。これらの作業は授業者が指導教官の倉本とともに複数回にわたって行い、間主観により、コーディングの見直しを行った。そのうち第3者として同述のゼミ生の石川・早川が確認した。

1	2	3
おみやげを買って5000円をもって八つ橋で700円計算してほくほく買って700×5として計算しながら買った。おかげですっきりするおみやげを買えました。これを通して大人になってお金の使い方を忘れずに買いたい	修学旅行で学んだレシートなど本当に必要な物など冷凍保存など生かして明日からしっかりと見えてお金を使いたい	大人になって今よりもっとお買い物が上手にできてお金の使い方も上達していきたいこれからお買い物の練習もしていきたい
お金があまったらほしい物を買ってしまうところを直すことができました。次からは学んだことを生かして本当にいる物を考えて買い物がほしいなと思いました	ほしい物をお金や時間に余裕をもって買うことができました。次からは消費期限をしっかりと見たり本当に必要なかを確かめてからお買い物ができるようにしたい	修学旅行を通してほしい物があったらすぐ買わずに本当に自分が必要な物が考えられて買わないようにしたい

(子どもの振り返りシートを座席にまとめた一部)

番号	テキスト	①テキスト中の注目すべき語句	②テキスト中の語句の言い換え	③左を説明するようなテキスト外の概念	④テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)
1	おみやげを買って5000円をもって八つ橋で700円計算してほくほく買って700×5として計算しながら買った。おかげですっきりするおみやげを買えました。これを通して大人になってお金の使い方を忘れずに買いたい	おみやげ/買う/5000円/700円/計算/すっきり/大人/お金の使い方	商品を計画的に使う	計算しながら商品を買うお金の使い方	予算を意識した商品選択
2	修学旅行で学んだレシートなど本当に必要な物など冷凍保存など生かして明日からしっかりと見えてお金を使いたい	必要な物/レシート	レシートを確認してお金を使う	レシートを確認してお金を使う	買い物で確認すべき視点
3	大人になって今よりもっとお買い物が上手にできてお金の使い方も上達していきたいこれからお買い物の練習もしていきたい	お金の使い方/これから/上手に	将来のお金の使いかた/買い物の経験	これからは買い物を上昇するために練習したい	買い物の上達は普段の買い物から
4	お金があまったらほしい物を買ってしまうところを直すことができました。次からは学んだことを生かして本当にいる物を考えて買い物がほしいなと思いました	ほしい物/学んだこと/いる物	買いたいものについて考えて買う/必要なものを選択する	ほしい物は予算が余ったら買う	残金の使い道の問い直し
5	ほしい物をお金や時間に余裕をもって買うことができました。次からは消費期限をしっかりと見たり本当に必要なかを確かめてからお買い物ができるようにしたい	ほしい物/お金/時間/余裕をもって/消費期限/必要/確かめながら	買いたい物に有意義に行うことができる/商品情報を確認する	お金や時間に余裕をもって買いたい	時間や金額を意識した
6	修学旅行を通してほしい物があったらすぐ買わずに本当に自分が必要な物が考えられて買わないようにしたい	ほしい物/必要/だに	自制しながら商品を選択	必要な物を考えてむだは使いたくない	ニーズの追及はむだをなくす

(SCATによる分析をしたものの一部)

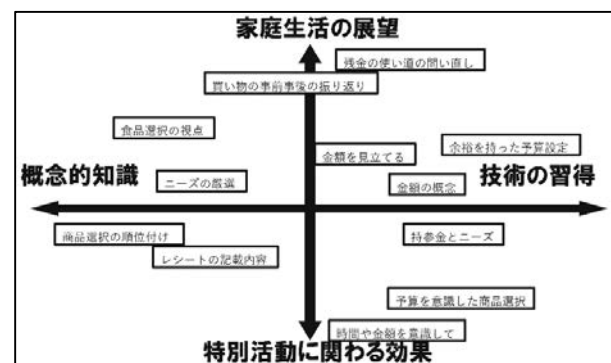
#### (2) ストーリー・ラインの分析方法

本実践のストーリー・ラインについて。子どもの発言を一つのストーリー・ラインとしてまとめる。本実践は6年生の2クラスで行ったため、1クラスごとにまとめる。ストーリー・ラインの作成にあたって、子どもの記述を「概念的知識」「技術の習得」「家庭生活の展望」「特別活動に関わる効果」の4つの概念にすみわけをする。KJ法を用いて整理する。

#### (3) ストーリー・ラインの考察

授業者は修学旅行のおみやげ購入についての事前学習や実際に買い物をした感想について振り返りの時間を設けた。その際にこれからどんな買い物をしていきたいかについて記述するように指導した。ストーリー・ライン(実践報告)の作成において、KJ法において表出した概念を使いながら行った。

#### 【1組】



事前学習で行った買い物計画や、活動班ごとに回るお店を決めたこと。またモジュール授業の内容を振り返る記述が見えた。実際に買い物計画をして、買い物活動で確認すべき視点として具体的にレシートを確認して行動できたことが分かった。買い物計画の際に、買いたい物の優先順位をつけたことから、買いたい物

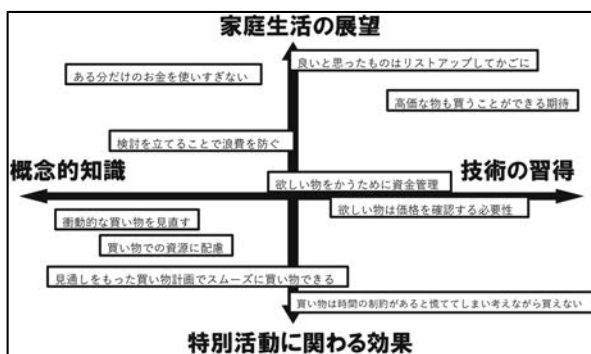


(ニーズ)を先に入れて、余ったお金で好きな物(ウオント)を買う、商品選択の順位づけで工夫した買い物の実践を行うことができていた。また、食品をおみやげで選ぶ場合は、なるべく日持ちのあるものを選ぶと食品選択の視点を持って商品を選択することができた。という記述からは、本実践だけでなく、5年生の家庭科で買い物学習をしたときに学んだ視点を実践することができていた。実際に計画を立てた買い物経験から考察した記述も見られた。限りあるお金の中で買いものした経験をとおして、買い物の事前事後ではお金はいくらあっても足りないことを実感している。そのために、自分が買ったものがどのくらい掛かったのかを把握するためにレシートを確認することに気づくことができた。欲しい物を買うときには持参金とニーズのバランスを考えて買いものをする場面があり、値段を確認しないで会計をしたときにびっくりしたため金額を見立てた買い物をする重要を実感した子どももいた。また事前学習の内容を受けて、5000円というお小遣いについて、実際に買い物をしてみると5000円は大金であると金額の概念を実感していた。また計画をたてないと5000円では足りなくなること把握することができていた。校外活動ということで、実際に買い物を行っている中で時期やお店によって商品の価格が異なることに気づき、余裕を持った予算設定が必要であることを理解することができた。

事前学習を経て、家庭生活に生かそうとする記述もあった。計画を立てた買い物を振り返り、将来のお金の使い方の練習であると捉え、買い物の上達は普通の買い物から行っていきたくないと振り返ることができた。また、これまでの買い物経験を振り返ることができ、残金の使い道の問い直しを行っている姿も見られた。

家庭科の学びが修学旅行への充実感に変わったことや買い物の成功体験について記述していた。時間や金額を意識した買い物計画を立てたことで余裕を持った買い物の仕方を実感することができた。また修学旅行では限られた金額の中で買い物をし、それに伴って本当に自分が必要としている物かを考え、ニーズの追及はむだをなくすことに気づくことができた。

#### 【2組】



子どもの振り返りとして、まず知識を学んだことに

についての記述されていた。その中でこれまでの買い物について見返していた。今まではその場のノリで買ってしまっていた。学習を通して、今までの自分の買い物を振り返り、欲しい物があつたらすぐ買ってしまおう、衝動的な買い物を見直すことができていた。また浪費を抑えることができると気づいていた。環境などの視点も踏まえて買い物考えることができていた。実際に買い物をすると、紙袋やビニール袋をたくさんもらう機会があつた。余分な買い物袋を断ることで、買い物での資源に配慮するよう気を付ける工夫を学んでいる。

実際に修学旅行で買い物をしたことを受けて、計画を立てた買い物では、目的に合った買い物ができることを実感し、買い物習慣をもって高価なものも買うことができる期待をもつことができた。これは、欲しい物を買うための資金を管理する視点も含んでいる。また所持しているお金から予算を決めることも実行することができた。また、おみやげを買う経験をして、買い物をするとき喜んでくれるかを考えたことを踏まえて渡す人を思いやった買い物をすることに気づいた。これからの消費についても考察することができている。ある分だけのお金を使いすぎないようにしたいと振り返ることができた。計画を立てたが、実際にお店に行ってみないと何があるかわからないと実感し、リストアップしてから最終的に欲しい物を決めていく。

修学旅行では買い物ができる時間が限られる。この経験から、買い物は時間の制約があると慌ててしまい考えながら買えないことに気づくことができた。買い物計画を立てて買い物をしたことで、スムーズに買い物できることを実感している。

#### (4) 理論記述の考察

2クラスのストーリー・ラインから見えてきた「理論記述」としては以下の4点が挙げられる。

①事前学習・科学的知識に関する理論  
→予算を意識した買い物の計画と資源に配慮した消費活動について学び、お金と資源を有意義に使う能力を育む。

②経験学習・技術の習得に関する記述  
→買い物経験を通して、金額の概念の実感や余裕を持った予算・時間設定に気づき、自己の消費に対する考え方を見直す能力を育む。

③①・②の両者を通した学びに関する記述  
→買い物をする時間や金額を意識した買い物計画を立てることで、目的に合った買い物ができ、心に余裕を持った買い物をすることから、浪費を抑えるばかりか、買い物に見通しを持って取り組む能力を育む。

④家庭生活の展望  
→将来のお金の使い方を見据えて、普通の買い物での実践を行い、資金を管理する能力を育む。

#### 2-4 質的研究の総合考察

KH Coder では本実践における各時間の子どもの学

びの経過を捉えることができた。大きな傾向としては、事前学習では、買い物計画にスポットライトをあてた振り返り記述が多かった。しかし、実際に買い物の経験活動を振り返ってみると、買い物計画を行ったことによるお金の使い方について記述していたことである。経験活動は子どもにとって金銭の使い方を刺激する学習過程であると言える。SCAT を用いて本実践の子どもの単元の振り返りを分析した。概念的知識について振り返ることができており、経験的活動を通じた技術の習得に関わる記述は家庭生活の展望に関する記述とともに振り返ることができていた。消費者リテラシーとは知識と経験の往還によって家庭生活への実践につながると考える。

### 第3節 量的研究と質的研究を通じた総合考察

教師力向上実習1・2を通して行ったアンケート結果を基に、消費者リテラシーの育成と家庭科の学びについて、SPSSによって生成した因子を用いて理論をつくることができた。4つの因子の回帰関係は数値が分散していく結果になったが、消費者リテラシーによる家庭科の学びへの回帰数値が上昇していたことから3因子が全体として、家庭科の学びを高めることができたと言える。具体的な子どもの記述として、質的分析を行うと、買い物に関する知識と経験の活動を通じて学習を振り返ることができた。

### 第5章 結論

本研究の Research Question について結論をまとめる。「小学校家庭科の範囲において形成できる消費者リテラシーとはどのようなものなのか。」について消費者リテラシーの再定義を以下のように行う。小学校家庭科における実践と実証を行い、知識を持って技能を用いる活動を行うことで、子どもの発言の中に家庭生活の展望を含めて学習を振り返ることができた。よって家庭生活での活用能力の育成を期待することができる。「座席表を SCAT で分析し、子どもの消費行動にたいする変容に理解」については、子どもの学習シートを分析して概念づけをすることで、子どもの学習した成果を捉え、まとめることができた。教師が一人ひとりの意見に何度も目を通すことで、子どもが学習したことを振り返りまとめることができた。

### 第6章 成果と課題

本研究における成果と課題について述べる。まず、理論的成果と課題についてである。小学校家庭科教育における消費者リテラシーの仮説を立て、実践・実証・考察をすることで、信頼性や妥当性を踏まえた消費者リテラシーの再定義をしたことには価値があると考えられる。理論的課題は、定義した消費者リテラシーのもととなる消費者教育と金銭教育は一つの教科で収まる能力ではないため、幅広い教科での考察を踏まえることができなかった点である。一方、実践的成果と課題についてであるが、連携協力校の既存のカリ

キュラムを用いて、消費者教育として知識の獲得と経験活動を踏まえた実践を試みたところ、家庭生活を展望して学ぶ子どもの姿が量的・質的研究による実証・考察で明らかとなった。だが、サンプル数が少なく、研究結果の信頼性に関しては低いかもしれない。今後は、本研究における成果と課題を踏まえて、子どもの家庭生活における問題意識を中心とした問題解決学習の授業実践と、家庭生活を展望しながら消費者リテラシーを育成に関わる実践研究に努めていきたい。

	成果	課題
理論的意義	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校家庭科において育成する消費者リテラシーの定義したこと。</li> <li>・消費者リテラシーの育成に向けて固有のカリキュラムの中で、知識と経験活動の往還のある消費授業を行ったこと。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・消費者教育や金銭教育を受けて、幅広い教科における消費者リテラシーの実践を考察する。</li> </ul>
実践的意義	<ul style="list-style-type: none"> <li>・消費者リテラシーの育成を目指して知識の獲得と経験活動を踏まえた実践を行うことができた。</li> <li>・子どもの意見をもとに座席表にまとめ、SCAT を用いて分析することができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サンプル数が少なく、研究結果の信頼性に関しては低い。</li> </ul>

主な引用・参考文献

- 荒井紀子 (2019) 未来の生活をつくる一家庭科で育む生活リテラシー 日本家庭科教育学会 明治図書出版株式会社 p.2
- 藤江真子 (1979) 家庭科教育における消費者教育指導の実践 家政教育社 p.331
- 鶴田敦子 (1992) 消費者教育を導入した家庭科の授業 家政教育社 p.11
- 武藤八恵子 (1992) 消費者教育を導入した家庭科の授業 家政教育社 p.37-38
- 宮坂広作 (2004) 金銭教育論序説 京都大学 生涯教育学・図書館情報学研究 Vol.3 p.21, 22, 23
- 宮坂広作 (2005) 金銭教育の実践 大学改革と生涯学習：山梨学院生涯学習センター紀要 第9号 p.27, 29-30
- 藤田智子 (2018) 実践から考える金融教育の現在と未来 株式会社東信堂 p.139-142
- 星野恵美子 (1995) 〈授業への挑戦129〉カルテ・座席表で子どもが見えてくる 明治図書出版株式会社 p.1-2, 10, 13, 55, 103
- 大谷尚 (2019) 質的研究の考え方 一般社団法人名古屋大学出版会 p.278-280
- 藤井千春 (2018) 主体的・対話的で深い学び問題解決学習入門 株式会社学芸みらい社
- 謝辞 本実践研究を形にすることができたのは、指導教官の倉本哲男先生の熱心なご指導を始め、連携協力校の先生方のご指導とご協力があったことだと感じております。感謝の気持ちと御礼を申し上げます。謝辞にかえさせていただきます。